

平成25年度 日独共同大学院プログラム 事後評価資料

1. 概要

領域	人文学・社会科学	分科	史学・政治学
		細目	西洋史・国際関係論
プロジェクト名	(和文) 人文社会科学における大学院教育の国際化のための日独共同教育体制の整備 (英文) Transformation of Civil Society: Japan and Germany in Comparison		
実施期間 (延長期間を含む)	2007年 9月 1日 ~ 2012年 8月31日 (60か月)		
日本側実施機関名	東京大学大学院総合文化研究科		
コーディネーター 所属・職・氏名	東京大学大学院総合文化研究科・教授・石田勇治		
構成員数	教員等 24名、 学生 31名		
ドイツ側実施機関名	マルティン・ルター・ハレ・ヴィッテンベルク大学 (ハレ大学) 第一哲学部		
コーディネーター 所属・職・氏名	ハレ大学第一哲学部・教授・Manfred HETTLING		
構成員数	教員等 14、 学生 21名		

2. 目標

終了時評価時に計画した目標とその達成度について記載してください。(2頁以内)

○終了時評価時の目標（終了時評価資料（計画調書）に記載した目標を転載のこと）

本プロジェクトでは、これまでのプロジェクト実施期間に、日独共同大学院プログラム科目を大学院総合文化研究科の特設科目として設置し、大学院博士課程学生に対する国際共同教育のための制度を大学院総合文化研究科の教育課程に組み入れる形で整備した。具体的には、日独共同教育のためのカリキュラムを整備するとともに、日独複数指導教員体制を整えた。また、大学院総合文化研究科の大学院博士課程学生のハレ大学への長期派遣を行なうとともに、教員についても集中講義、研究交流のための相互派遣を行なうことで、日独両国間の大学院博士課程学生ならびに教員間の相互交流の拡大と恒常化を実現しつつある。

今後は、人文社会科学における国際共同研究のための基盤整備に資するため、

- ①平成 21 年度（2 名程度）に引き続き、質の高い博士論文が多数提出されるため、一層の支援を行なうこと、
 - ②本プロジェクトを核として日独学術交流・学術協力のための機構的枠組を整えること、
 - ③人材育成の観点から、大学院博士課程における国際共同教育のための教材開発、教育方法論の開発を行なうこと、
 - ④本プロジェクト終了後も共同課程を維持するための財政基盤を整え、大学院総合文化研究科からの経常支出によるプログラム運営の実現に向けて取り組むこと、
 - ⑤本プログラムと類似の国際的協力関係を他大学との間で実現すべく努力すること、
- が目標となる。

○目標に対する達成度

- 目標は想定以上に達成された。
- 目標は想定どおり達成された。
- 目標はある程度達成された。
- 目標はほとんど達成されなかった。

【理由】

本プロジェクトでは、二国間博士共同課程の整備、パートナー校との継続的協力関係の構築、若手研究者の育成、国際学術交流の各点において、従来のわが国における大学院博士課程の国際交流の水準と枠組みを大きく越える顕著な成果をあげた。以下、上に掲げた①～⑤の目標について具体的に述べる。

①質の高い博士論文の執筆・研究支援という本プロジェクト最上位の目標は、2009 年度 2 本、2012 年度 1 本、2013 年度 4 本の博論提出が示すように、着実に達成されてきた。わが国の文系研究者の間に長く見られた「博論執筆はライフワーク」とする考え方は過去のものとなりつつあるが、本プログラムで実現したサンドイッチ形式の留学、日独複数指導教員制、合同審査体制によって、国際的に高い水準の博士論文研究の速やかな遂行が可能となった。

②本プロジェクトは、史学、哲学、社会学、政治学、地域文化研究（日本研究、ドイツ研究）を主な柱に、東京大学とハレ大学のプログラム教員の最新の研究成果と問題意識に下支えされた学際的共同課

程を実行してきた。とくに「日独市民社会の比較研究」を本プロジェクトの共同課題に位置づけ、共同課程と有機的に繋いだことで、本プロジェクトの第二の目標となる日独学術交流・学術協力を大いに貢献した。具体的には、東京とハレで毎年春と秋に行われた共同セミナーの一環として国際シンポジウムを数多く開催した。なかでも「ドイツと日本—市民社会の比較研究」（2007年10月、ハレ）、「市民と市民社会を問う—過去・現在・未来」（2008年3月、東京）、「日独比較研究の可能性—市民社会の観点から」（2009年3月、東京）、「市民社会のジェンダー—日独比較の基盤」（2010年9月、ハレ）、「ポスト3.11の日独市民社会」（2012年3月、東京）では、日独以外の著名な研究者の協力も得ながら市民社会研究の最新の成果を発信し、日独双方の学術発展に寄与した。

③教育方法の開発が顕著な成果となって現れたのが、前述の共同セミナーである。ここでは日独双方のプログラム履修生が一同に会するが、各自の研究発表を行うだけでなく、日独双方の市民社会研究に必要な知識を習得し、あわせて学術的な討論スキルを鍛錬するよう努めた。少人数のグループ討議、パワーポイントを用いたコミュニケーションな発表と討論、フィールドワークの実践を通じて、高い専門性と広い視野をもって国際的に活躍できるアカデミックリーダーの育成に力を入れた。その成果として、2009年度以降、本プログラム出身者11名が国内外の大学等の研究機関に専任講師、助教、特任研究員等として採用されている。

教材開発としては、本プログラムの研究課題「日独市民社会の比較研究」の下で概念史データベースの作成に取り組んだ。日独の公文書館・図書館所蔵文献を網羅的に蒐集・選別して資料集（全2巻、総703頁、未公刊）を作成し、「日独研究論」（プログラム科目）の教材として活用した。これを土台にドイツでは論文集“Bürger und Shimin”、日本では論文集『市民社会の史的展開—理念と実相』が2013年度中に刊行される。

④本プロジェクト終了後を視野に入れながら、日独双方で一致協力して新規プロジェクトの立ち上げに取り組んだ。ハレ大学コーディネーターおよび参加教員との周回協議を経て、本プロジェクトが達成した果実を引き継ぎつつ、市民社会研究に軸足を移した新しいプロジェクト「学際的市民社会研究に向けた日独共同教育体制の確立」を日独双方で構想し、同時に申請したところ、ともに採択されるにいたった。日本側新コーディネーターの山脇直司教授と、同教授停年退職後その後任者となる梶谷真司准教授はともに本プロジェクトの中核を担っており、2012年9月にスタートした新プロジェクトはすでに円滑に進捗している。

⑤本プロジェクトを通して構築・整備されたハレ大学との共同教育研究体制は、ドイツの他の大学関係者に強い関心を引き起こし、ベルリン自由大学、テュービンゲン大学、ボン大学から、それぞれ同様のプログラムを東京大学との間に設置できないか問い合わせを受けている。その他、パリ第七大学文化・文学・言語学部、オックスフォード大学国際開発部との間でもグローバル時代に向けたトップリーダー育成に向けた共同教育の可能性について話し合いを始めた。今後、財政的裏づけを保障する学術助成機関が出現すれば、本プロジェクトの経験を活かしながら、わが国の大学院教育のいっそうの国際化のために努力を継続する所存である。

3. これまでの交流を通じて得られた成果

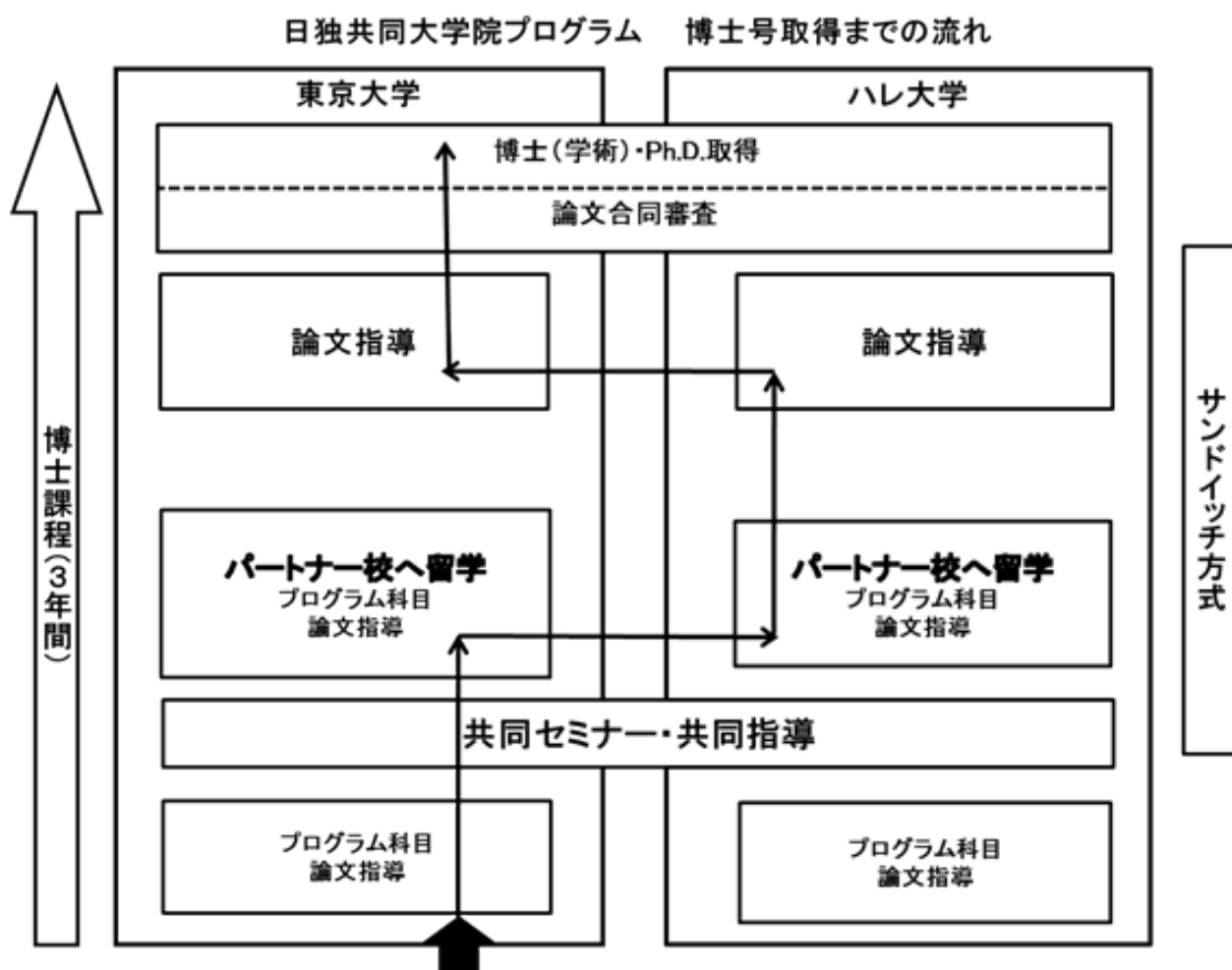
これまでの交流を通じての成果を「共同課程の整備」、「継続的協力関係」、及び「教育研究効果」の観点から記載してください。(3頁以内)

○共同課程の整備

1. 共同課程の概要

ハレ大学コーディネーターおよび参加教員との綿密な協力の下、東京大学大学院総合文化研究科内に「日独共同大学院プログラム」を設置し、次のような共同課程を整備した。

①「日独サンドイッチ方式」の留学：参加学生（履修者）に対して、東京大学→ハレ大学（留学）→東京大学の順に研究滞在するサンドイッチ方式による二国間共同教育を実施した。



②「日独複数指導教員」体制の構築：履修者に対して、東京大学、ハレ大学双方から各1名の指導教員を設け、両教員の緊密な連携の下、履修生に対するきめ細やかな日独共同指導体制を構築した。

③「日独合同審査体制」の構築：本プログラム参加学生の博士論文審査にパートナー校の指導教員が副査として加わる体制を構築した。

④「日独共同セミナー」の開催：東京大学、ハレ大学双方のプログラム教員と参加学生による共同セミナー（プログラム科目、約1週間）を毎年春と秋の2回、東京とハレにて計11回にわたり実施した。ここでは毎回日独双方の履修生が博士論文の研究報告を行い、あわせて研究指導を実施した。共同セミ

ナーのテーマ設定と運営は日独双方のプログラム教員の合議に基づき行われ、共同課程の課題と成果を確認する場としても機能してきた。

⑤「日独教員交換」による集中講義の実施：ハレ大学プログラム教員が東京大学で、東京大学プログラム教員がハレ大学でそれぞれ集中講義（約1週間）を実施してきた。

⑥「マルチランゲージ教育」の実施：履修生の研究対象がドイツと日本であることから、ドイツ語、日本語、英語を学術言語とする多言語専門教育を展開してきた。

⑦海外滞在旅費の支援：履修生のハレ大学での研究滞在（年間10ヶ月以内）について、海外滞在費の支援を行ってきた。

2. プログラム科目

東京大学大学院総合文化研究科で開講された「日独共同大学院プログラム」の授業科目は次の通り。

①日独研究論：日独地域研究ならびに日独比較研究のために必須の基礎知識の習得をめざす講義科目。

②日独研究特別研究：方法論上のより専門的な訓練を行なうための演習科目。

③日独研究演習：春と秋の日独共同セミナーへの参加と研究発表。

④日独研究実験実習：博士論文研究に向けたフィールド・リサーチならびにその成果を取り入れた外国語による研究報告。

なお、ハレ大学で展開されたプログラム科目の内、上級ゼミナールは上記①、コロキウムは上記②に読み替えられ、単位認定された。

○継続的協力関係

1. 学術協定と学生交流覚書

東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学歴史学・哲学・社会科学部（2006年10月より第一哲学部に改組）は、2006年6月/7月に学術協力協定書ならびに学生交流に関する覚書を締結した。

学生交流に関する覚書により、本プロジェクトの基礎となる、年間5名までの学生交換、授業料不徴収、単位互換についての合意がなされた。それにより、東京大学大学院総合文化研究科で教育を受けるハレ大学の学生は、本研究科の特別聴講学生として取り扱われる。特別聴講学生については、大学院総合文化研究科・教養学部附属の駒場図書館の利用、大学院総合文化研究科「日独共同大学院プログラム」学生室の利用等ができるなど、研究活動を円滑に進めるための各種の配慮を受ける。また、本覚書に基づき、ハレ大学で教育を受ける大学院総合文化研究科の学生についても、本覚書で保障された各種の優遇措置を受けるとともに、研究活動を円滑に進めるための各種の配慮を受けることになった。

2. 組織的な協力体制

日独双方に本プログラムのための事務局が設けられ、履修生ならびに教員の組織的交流のために常に協力した。日本側は東京大学大学院総合文化研究科グローバル研究機構ドイツ・ヨーロッパ研究センターが、ドイツ側はハレ大学第一哲学部日本学科が事務局を担った。5年間の日独共同教育を實踐して得た経験と知見は、2012年9月に発足した新規プロジェクト「学際的市民社会研究に向けた日独共同教育体制の確立」ならびに今後の日独、日欧間の学術交流に速やかに引き継がれるであろう。

○教育研究効果

1. 博士課程における国際的研究環境の整備

本プログラム参加学生は、出身大学の指導教員の指導と同時に、パートナー校での長期・短期滞在時にパートナー校の指導教員による指導を受ける。そして春と秋の共同セミナー時にはパートナー校プログラム教員ならびにセミナー実施国で関連分野の第一人者の指導を受ける機会も提供される。また「日独研究実験実習」の枠内でのドイツ研究滞在にはドイツ側指導教員による研究指導が組み込まれ、電子メール等を使った恒常的な指導も行われる。こうした緊密な日独共同指導体制の下で、履修者は日独双方の指導教員による高度で丁寧な研究指導を受けることが可能となる。日本とドイツという異なる文化的背景をもつ二つの国の若手研究者が一同に会して切磋琢磨することで互いに全く新しい刺激をえるだけでなく、人文・社会知の展開に向けた展望を実感した履修者は多い。本プログラムを通して、効率的な留学と海外フィールドリサーチの機会、研究指導の各点において、従来よりも格段に恵まれた博士課程の教育環境が整備された。

2. 国際的学術コミュニケーション力の強化

多くの参加学生が、パートナー校との共同セミナーや研究滞在を通して、日独双方の人文社会科学研究の最先端の成果に触れ、それらを摂取しつつ、自らもその研究を積極的に国際的学術コミュニティーに向けて発信するようになった。国際的な学術の場におけるコミュニケーション能力の育成には経験を積むことが必要だが、そのために十分な機会をつくることができた。これは共同セミナー時の研究報告、出身校での論文コロキウム等で行なわれる博論研究報告の際に日独双方の参加教員によって確認されているところである。

3. 合同審査体制の構築と共同学位

本プログラムでは共同学位（ダブルディグリー）は制度的に想定されておらず、そのために制度改定には手をつけなかったが、博士論文の合同審査体制はすでに構築された。したがって今後の取り組み次第で共同学位の実現は可能となろう。

4. 市民社会の日独比較研究

本プログラムには発足当初、日本側には特定の研究課題は設定されていなかったが、ハレ大の働きかけで始まった研究課題「日独市民社会の比較研究」はすでに本プログラムの実質的な共同研究課題に位置づけられている。とくに春と秋の共同セミナーで常に本テーマが取り上げられ、その研究成果がドイツではハレ大学コーディネーターのマンフレート・ヘットリンク教授の編集により論文集“Bürger und Shimin”として、日本では東京大学コーディネーターの石田勇治教授の編集により論文集『市民社会の史的展開—理念と実相』（「現代ドイツへの新たな視座」第一巻、勉誠出版）として2013年度中に刊行される。

4. プロジェクトの実施状況

(1) 分野及びプロジェクトの深化・発展

終了時評価時に記載した実施機関の目標及び必要性を踏まえて、どのようにして対象となる分野及びプロジェクトがドイツとの交流を通して深化・発展したか記載してください。

本プロジェクトの目的は、わが国における大学院博士課程教育の国際化の推進にあたりフラッグシップの役割を果たすことにあるが、プログラムの特徴である「サンドイッチ方式の留学」、「複数指導教員体制」、「博士論文合同審査体制」を活用しながら、学生・教員の相互交換を積極的に推し進め、大きな成果をあげた。これは今後の二国間共同課程のモデルケースとなろう。

1. プロジェクト実施期間に日本側で合計 31 名、ドイツ側で 21 名（いずれも実数）の院生が日独共同大学院プログラムを履修した。実施期間中に日独合わせて 11 名が博士論文を提出し、博士号を取得した。2013 年度博士号取得予定者を加えれば、日独合わせて 18 名となる。実施期間中に行われた 11 本の博論審査の内、3 本について日独双方の教員が審査員として参加した。

2. 2011 年度から 2012 年度にかけて東京大学プログラム履修生に博士論文中間報告の場としてワーキング・ペーパーの執筆を強く勧奨し、日独双方の指導教員の助言を得ながら 10 本（内、ドイツ語 7 本）が刊行された。それらは共同課程の中間成果としてハレ大学学術コミュニティーで高く評価された。

3. 本プログラム履修生のなかには、ドイツで開催された日本学会研究集会で成果報告をする意欲的な学生も現れている。ドイツにおける日本研究の拠点であるハレ大学との共同課程の実施は今後の日独学术交流だけでなく、ドイツにおける日本研究の活性化にも貢献したといえよう。

4. 本プロジェクト全体の研究成果として日独双方で論集が 2013 年度中に公刊される。ドイツでは、日独双方の教員・学生による研究班「意味論」の研究成果として、論文集 Hettling, Manfred / Schölz, Tino (Hg.): „Bürger“ und „shimin“. Wortfelder und Begriffstraditionen im Deutschen und Japanischen (ドイツと日本における„Bürger“と「市民」の言語領域と概念的伝統) (Berlin) が刊行される。日本でも同様の趣旨で日独双方の教員・学生が寄稿した論集「市民社会の史的展開」(勉誠出版) が刊行される。

(2) コーディネーター及び参加教員の取り組み状況

日本側コーディネーター及び参加教員は当該プロジェクトの実施を適切に行ってきたかについて、日本側コーディネーターや教員等の取り組み状況に触れながら記載してください。

日本側コーディネーターおよび参加教員は、プロジェクト実施期間を通じて、ドイツ側コーディネーターおよび参加教員と常時連絡・連携しながら、「日独研究論」など日独共同大学院プログラム科目の授業実施（パートナー校における集中講義を含む）、東京大学だけでなくパートナー校での博士論文審査、春と秋の共同セミナーの準備と運営（各セッションの担当、パートナー校履修者の研究指導など）、国際シンポジウムの開催などに従事してきた。日本側教員による集中講義は 2008 年度、2010 年度、2012 年度にハレ大学で実施された。日本側コーディネーターおよび参加教員はパートナー校の参加学生と電子メールで、あるいは共同セミナー開催時に直接、論文指導を行った。とくにコーディネーターの石田教授は 2012 年度にハレ大学客員教授としてハレに長期滞在（2 ヶ月）し、集中講義、論文指導を実施し、あわせてドイツ側コーディネーターおよび参加教員と今後の共同研究・教育の可能性について討議した。

(3)教育研究環境の整備

当該大学において、プロジェクトの目的を達成するにあたって必要な施設設備、及び経済的負担の軽減措置等、組織的な取り組み状況について記載してください。

日独共同大学院プログラムの教員・学生の派遣と受入は、「東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学第一哲学部との間における学術協力協定書および学生交流に関する覚書」（2006年6月23日／7月5日締結、2011年7月5日更新）に基づいて行われた。

1. 受入体制

①日本側：

外国人学生の大学内外の手続き支援、宿舍の手配、勉学・研究活動に必要な学内外の情報提供は、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部の教務課国際交流支援係、国際研究協力室、留学生相談室、国際センター駒場オフィス（駒場インターナショナルオフィス・サポートセンター）が協力して行った。なかでもこれまで交流協定に基づく交換留学生の指導を担当してきた国際研究協力室には、Abroad in Komaba (AIKOM) と呼ばれる、東京大学教養学部と世界 19 か国 28 大学との間で実施中の「短期交換留学制度」に基づき、毎年 25 名以上の交換留学生のために宿舍を手配し、精神面の支援（カウンセリング）を含むメンター制度を運営してきた実績があり、本プログラムで来日するハレ大学の学生にもそれらと同様のサポートが得られた。これらのサポートに加えて、ハレ大学からの学生受入数に応じて必要数の学生（ドイツ語に堪能な者）を謝金で雇用し、国際研究協力室の担当者の指示のもとにメンターとして留学生の支援にあたらせた結果、受入学生は留学当初の煩雑な手続きをスムーズにこなすことができた。

また、教育、研究に関連する領域の実務は総合文化研究科附属グローバル地域研究機構ドイツ・ヨーロッパ研究センターが担当した。ドイツ・ヨーロッパ研究センターは、これまでに、外国人研究者の招聘、国際シンポジウムの企画・運営等、多くの国際研究交流を行ってきた実績をもとに、ドイツ側教員、学生に対して柔軟かつきめ細やかに対応し、受入教員、学生が日本到着後速やかに教育・研究活動に専念できるよう努力した。

総合文化研究科では、日独共同大学院プログラム専用の学生室と客員研究員のためのスペースが設置され、PC、プリンター、無線 LAN などの必要なインフラ設備を始め、市民社会研究の基本文献も開架されており、教員および学生が研究に打ち込める環境設備が整えられた。

②ドイツ側：

ハレ大学では派遣学生の受入手続き（学籍登録、寮の手配）は、日独共同大学院プログラム事務局およびハレ大学外国人学生課が連携をして対応した。ハレ大学で教育を受ける学生については、ハレ大学滞在中はハレ大学の学生寮を利用することができた。ハレ大学では、日本人留学生受け入れに際し、ビザ申請、住民登録等、銀行口座開設などを手伝えるメンターが用意されていたため、日本人留学生は到着後すぐに研究に着手することができた。また、日独共同大学院プログラム専用の学生室と客員教員のスペースが設置されており、各人に対して専用の机と PC が貸与され、理想的な研究環境のもと派遣教員、学生とともに研究・教育活動に専念することができた。

2. 授業料不徴収

協定に基づき、派遣学生は、派遣先の大学での授業料、検定料、入学料は不徴収とした。

3. 客員教員招聘

2010年1月～3月までの間、本プロジェクトのドイツ側参加教員の招聘（2ヶ月間）のために、大学院総合文化研究科の客員教員招聘枠が提供された。ハレ大学でも、2012年1月～2月までの2ヶ月間、本プロジェクトの日本側参加教員の招聘（2ヶ月）のために客員招聘枠が提供された。

(4)経費の合理性

経費の執行状況について記載してください。

日本学術振興会から支給された本プロジェクトの実施経費は、事業趣旨に沿って、公正・適切かつ計画的に支出された。実施経費の大半は、教員等と学生の派遣旅費（学生：ハレ大学に長期留学のための長期派遣、セミナー参加およびフィールド・リサーチ（研究調査・史資料調査）のための短期派遣、教員：集中講義の開講、セミナー参加）として支出された。実施経費における各年度の旅費の割合は、平成 19 年度 83%、平成 20 年度 85%、平成 21 年度 82%、平成 22 年度 79%（震災の影響で派遣が中止されたため 8 割を達成できず）、平成 23 年度 82%、平成 24 年度 90%でプロジェクト要件を十分に満たしている。

謝金の支出は、主に国際シンポジウムの開催時の同時通訳者の謝金、外部研究者の講演謝金、共同セミナー開催時の運営補助者への謝金として支払われた。国際シンポジウムでは、日独の両言語の使用に重きが置かれたため、同時通訳者への謝金に多くの支出が割かれた。

物品費で多くの割合を占めたのは、市民社会関連の基本文献および最新研究文献の購入費用であった。プロジェクト実施経費で購入した市民社会研究に関する基本文献と最新研究文献は日独共同大学院プログラム専用図書として、プロジェクト関連教員および学生間で研究に活用されている。

5. 今後の展望

今後、当該大学とドイツ側大学との共同教育研究活動を持続的に展開してく上での将来展望について記載してください。

本プロジェクトの成果は、すでに同じ日独共同大学院プログラムとして採用の決まった新規プロジェクト「学際的市民社会研究に向けた日独共同教育体制の確立」（コーディネーター：山脇直司教授、停年退職後は梶谷真司准教授）に速やかに継承される。新規プロジェクトの目標の第一は、東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学第一哲学部との間でダブルディグリー制度の確立を目指すことである。具体的な道筋として、初年度に前述の整備プロジェクトの枠内で構築された次の4項目、すなわち①10ヶ月以内の留学を博士課程に組み込んだ上で参加大学院学生が「東京→ハレ→東京」の順に滞在するサンドイッチ方式の留学制度、②東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学の双方から指導教員を得て、両名連携の下で論文指導を受ける複数指導教員制度、③両大学の参加教員が相手大学で定期的実施する集中講義（教員交換）、④毎年2回東京とハレで交互に開催される日独共同セミナー、をすべて実施し、あわせて参加大学院学生が日独両言語で博士論文を執筆するための支援体制をTA制度等の活用によって構築する。これによって遅くとも本プロジェクト実施2年目までにダブルディグリー制度を視野に入れた博士論文の合同審査体制をハレ大学第一哲学部との間で確立する。本プロジェクトでは参加大学院学生に対して厳格な指導を行い、規定年限内の博士論文提出を強く求める。数値目標として、経費支給期間を通して日本側で少なくとも10件の合同審査による学位（博士号）の授与をめざす。

新規プロジェクトの第二の目標は、本プロジェクト実施期間中に着手した「日独市民社会の比較研究」の成果を継承し、研究対象をグローバル社会へと拡大した日独共同研究課題「学際的市民社会研究」を実施し、これを日独共同教育と有機的に関連づけていっそう発展させることである。具体的には、日独両コーディネーターの連携指導の下で、日独参加教員とポスドクが日独共同教育と並行して、次の7つのサブテーマ、①市民社会の意味論研究、②公共哲学の可能性、③国家＝社会関係の史的分析、④アクターとしての自律組織研究、⑤トランスナショナル市民社会研究、⑥反市民社会の思想と運動、⑦市民社会と平和構築に従事する。サブテーマは共同セミナーで主題として取り上げられ、大学院学生も研究にコミットすることができる。こうした日独共同研究と共同教育の有機的なつながりを通して、本プロジェクトが世界でも有数の「市民社会研究」拠点となることをめざす。本研究の成果は、経費支給期間中に行う国際シンポジウムや最終年度に刊行される日独英三言語による論文集だけでなく、本プロジェクトのウェブサイトで常時公開すると同時に、本研究関連のニュースレター等を先の三言語で公開する。

経費支給期間終了後は、期間中に蓄積した実績とノウハウを活用し、完成されたカリキュラムと共同教育体制をハレ大学との間で維持・発展するように努める。最大の問題は、学生交流と教員交換ならびに共同セミナー開催について、期間中と同様の密度を保つための財源の確保である。経費支給期間中に新たな財源確保に努めるが、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターを通して、ドイツ学術交流会やザクセン・アンハルト州政府などドイツ側諸機関に外部資金の提供を要請することは可能である。

さらに、ハレ大学との間で築いた日独共同研究体制を、ベルリン自由大学、ボン大学、テュービンゲン大学など、東京大学総合文化研究科の専任教員と緊密な関係にあるドイツの有力大学との間で構築する。そして可能なら英仏の有力大学との間で「日欧共同大学院プログラム」を展開したい。

6. 活動実績

(1)実施した「共同課程」について概略を記入してください。

1	科目名等	日独研究論Ⅰ	提供期間	2008年3月～現在にいたる
	提供した大学	東京大学	単位数	各学期2
	概要	日独共同大学院プログラム参加者のための共通科目として設置。日独共同大学院プログラムに参加する学生が、日独地域研究、日独比較研究、日独関係論等の方法論を習得するとともに、外国語によるディスカッション、成果報告の訓練を行なう。		
2	科目名等	日独研究論Ⅱ	提供期間	2007年10月～現在にいたる
	提供した大学	ハレ大学	単位数	各学期2
	概要	日独共同大学院プログラム参加者のための共通科目としてハレ大学で提供される上級ゼミナール(大学院ゼミ)。日独共同大学院プログラム参加教員のうち2名による上級ゼミナール(大学院ゼミ)が開講される。このゼミに参加する学生に対して、ハレ大学の日独共同大学院プログラム運営機関から発行される所定の履修証明書に基づき、大学院総合文化研究科の日独共同大学院プログラム運営委員会が単位を認定する。		
3	科目名等	日独研究特別研究Ⅰ	提供期間	2007年10月～現在にいたる
	提供した大学	ハレ大学	単位数	各学期2
	概要	ハレ大学で提供される上級ゼミナール(大学院ゼミ)に参加する学生に対して、ゼミ担当教員による証明書、もしくはゼミ担当教員の承認のもとにハレ大学の日独共同大学院プログラム運営機関から発行される所定の履修証明書に基づき、大学院総合文化研究科の日独共同大学院プログラム運営委員会が単位を認定する。上級ゼミナールは、個々人がその方法論に応じて適切に選択し、履修するものとする。		
4	科目名等	日独研究特別研究Ⅱ	提供期間	2007年10月～現在にいたる
	提供した大学	ハレ大学	単位数	各学期2
	概要	ハレ大学日独共同大学院プログラムで提供されるコロキウム。単位取得のためには優れた口頭報告が求められる。コロキウムに参加する学生に対して、ハレ大学の日独共同大学院プログラム運営機関から発行される所定の履修証明書に基づき、大学院総合文化研究科の日独共同大学院プログラム運営委員会が単位を認定する。		
5	科目名等	日独研究演習Ⅰ・Ⅱ	提供期間	2007年10月～現在にいたる
	提供した大学	東京大学・ハレ大学	単位数	各学期2
	概要	ハレ(毎年10月)と東京(毎年3月)で交互に開催される共同セミナー(年2回)。本プロジェクトの共同研究課題に関連したテーマについて、研究者による基調講演、学生による研究報告等を行なう。新規にプログラムに登録した学生の指導教員(パートナー校)を決定するための機会ともなる。全体として、日独のプログラム参加大学院学生、参加教員の相互交流をはかる。共同セミナーは日本側参加者にとっては選択、ドイツ側参加者にとっては必修となる。		
6	科目名等	日独研究実験実習	提供期間	2007年10月～現在にいたる
	提供した大学	東京大学	単位数	各学期2(複数回の履修不可)
	概要	博士論文作成に向けたフィールド・リサーチ(研究調査・史資料収集)ならびに、その成果を取り入れた研究報告(外国語)を、日独共同大学院プログラムの日独双方の指導教員が合意に基づいて単位認定する。		

※ 記入欄が足りない場合には、適宜追加してください。

(2)このプロジェクトに関連した主な発表論文・著者名

教員等・大学院学生が本プロジェクトの成果として実施期間中に発表した主な論文等(本事業名が明記されているもの)を記載してください。参加教員等・大学院学生の氏名にはアンダーラインを付してください。また、ドイツ側の参加者との共著論文には、文頭の番号に○印を付してください。

①学術雑誌等(紀要・論文集等も含む)に発表した論文又は著書

・査読がある場合、印刷済み及び採録決定済のものに限り、査読中・投稿中のものは除く。また「査読」欄に○印を付す。

整理番号	著者名、発表論文名、学会誌名、発表年月巻号等	査読	相手国名 (共著の場合)
1	<u>辻英史</u> , 日独共同大学院プログラムセミナー&シンポジウム 2007年IGK秋期セミナーに参加して, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターNewsletter, 13, 3-4 (2008).		
②	G. Foljanty-Jost & Y. Ishida, Neue Perspektiven für den Deutsch-Japanischen Wissenschaftsaustausch: Binationale Graduiertenkollegs in den Geistes- und Sozialwissenschaften, "Transformations of Civic Society" - Working Papers of the International Graduate School Halle Tōkyō, 3 (2009).		ドイツ
3	<u>長沢優子</u> , 日独共同大学院プログラムセミナー&シンポジウム2008年秋IGKセミナーの感想, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターNewsletter, 5-6 (2009).		
4	<u>山川智子</u> , 日独共同大学院プログラムセミナー&シンポジウム2008年秋IGKセミナーに参加して, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターNewsletter, 15, 4-5 (2009).		
5	<u>Y. Akiyama</u> , Die Hegemonie der Mehrheit in einer multikulturellen Gesellschaft. Unter besonderer Berücksichtigung des Schächtverbotes im Jahr 1893 in der Schweiz, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 4, 1-19 (2010).	○	
6	<u>佐藤公紀</u> , ヴァイマル共和国(1919-1933年)における監獄改革・犯罪生物学・釈放者扶助、博士学位論文, 東京大学, 2010年4月.	○	
7	<u>増田好純</u> , ナチ・ドイツにおける労働動員—ドイツ人、外国人、強制収容所囚人: ユンカーズ航空機・発動機製作所を事例に—, 博士学位論文, 東京大学, 2010年4月.	○	
8	<u>N. Yanagihara</u> , Zur (un)freiwilligen Beteiligung der Frauen an der Wehraktivität - Die Frauenvereinigung zur Landesverteidigung (Kokubō fujin-kai) 1931-1945, in: M. Sprotte, T. Schölz (Hg.), Der mobilisierte Bürger? Aspekte einer zivilgesellschaftlichen Partizipation im Japan der Kriegszeit (1931-1945), 45-50 (2010).	○	
9	<u>山脇直司</u> , 日独共同大学院プログラム 市民社会論の現在と展望—日独共同大学院プログラムによせて—, 東京大学教養学部報, 526 (2010).		
10	<u>Y. Akiyama</u> , Perspektiven auf die Deutschland- und Europastudien in Japan —aus der Sicht einer jungen Wissenschaftlerin, in: European Studies, 10, 101-104 (2011).		
11	<u>伊豆田俊輔</u> , 日独共同大学院プログラム(IGK)市民社会とジェンダー秩序・死刑制度—2010年度春季合同セミナーに参加して—, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターNewsletter, 17, 6-8 (2011).		
12	<u>T. Saito</u> , Perspektiven auf die Deutschland- und Europastudien in Japan —aus der Sicht eines jungen Kant-Forschers, in: European Studies, 10, 105-108 (2011).		
13	<u>田村円</u> , ナチズム体制崩壊後の「ドイツ=ユダヤ関係」の展開 1945-1953, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 5, 1-21 (2011).	○	
14	<u>H. Mitani</u> , Die Formierung von Öffentlichkeit in Japan. Eine Bilanz in vergleichender Perspektive, "Transformations of Civic Society" - Working Papers of the International Graduate School Halle Tōkyō, 10 (2011).		
15	<u>R. Ishizaki</u> , Eine Studie über den deutschen Lyriker Richard Dehmel (1863-1920) um die Wende vom 19. zum 20. Jahrhundert, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 8, 1-16 (2012).	○	

整理番号	著者名、発表論文名、学会誌名、発表年月巻号等	査読	相手国名 (共著の場合)
16	<u>S. Izuta</u> , Von „Zweierlei Deutschland“ zur „Erneuerung Deutschlands“ – Vorgeschichte des Kulturbundes im Zweiten Weltkrieg-, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 6, 1-20 (2012).	○	
17	<u>H. Imai</u> , Gewalterfahrung und persönlicher Wandel in der Zwischenkriegszeit. Vom Freikorpsführer zum Kommunisten – Das Beispiel Josef “Beppo” Römer, 近現代史研究, 近現代史研究会, 1, 91-96 (2012).	○	
18	<u>今井宏昌</u> , ヴァイマル期ドイツ義勇軍指導者ヨーゼフ・ベッポ・レーマーの「越境」:「ナチズムの前衛」テーゼへの一反証, 七隈史学, 七隈史学会, 14, 111-125 (2012).	○	
19	<u>今井宏昌</u> , 日独共同大学院プログラム(IGK), 2011 年秋季・共同セミナー参加記, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターNEWSLETTER, 18, 2-4 (2012).		
20	<u>今井宏昌</u> , ヴァイマル共和国初期における義勇軍経験:個人史の比較を通じて, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 10, 1-12 (2012).	○	
21	<u>H. Imai</u> , Auf dem Weg in den Widerstand? Freikorpsereferenzen Julius Lebers und Josef “Beppo” Römers in der Frühzeit der Weimarer Republik, 近現代史研究, 近現代史研究会, 2, 51-56 (2012).	○	
22	<u>梶谷真司</u> , 日独共同大学院とシンポジウム「ポスト 3.11 の日独市民社会」, 東京大学教養学部報, 549 (2012).		
23	<u>T. Saito</u> , Die andere „bürgerliche Gesellschaft“ bei Kant: das Problem des moralischen Bösen und die Strategie der Aufklärung, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 9, 1-20 (2012).	○	
24	<u>白鳥まや</u> , 日独共同大学院プログラム(IGK), 2012 年春季・共同セミナー・シンポジウム参加記, 東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センターNEWSLETTER, 18, 5-8(2012).		
25	<u>白鳥まや</u> , 「異質なもの」の理解理論としての解釈学—シュライアーマツハ—とガダマーについての「理解」とは何か—, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 7, 1-19 (2012).	○	
26	<u>Y. Nagasawa</u> , Die Kontroversen um die Nationalsymbole in Deutschland und Österreich in der Zwischenkriegszeit: zum Zusammenhang mit dem großdeutschen Gedanken, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 11, 1-19 (2012).	○	
27	<u>H. Igarj</u> , Die „Grauzone“ zwischen den Opfern und den Tätern: eine Betrachtung über die Holocaust-Überlebenden, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 12, 1-14 (2013).	○	
28	<u>M. Tamura</u> , Deutsche und Juden im Nachkriegsdeutschland —Karl Marx (1897-1966) als Brückenschläger—, Working Paper for JSPS-DFG Japanese-German Graduate Externship, 13, 1-20 (2013).	○	
29	<u>H. Mitani</u> , Die Formierung von Öffentlichkeit in Japan. Eine Bilanz in vergleichender Perspektive, in: Bürger und Staat in Japan, Halle 2013, 41-62.		
30	<u>N. Yamawaki</u> , Demokratie und civil society in Japan aus Sicht der public philosophy, in: Bürger und Staat in Japan, Halle 2013, 19-40.		
31	<u>今井宏昌</u> , ヴァイマル期ドイツ義勇軍関係史料とドイツ各地の文書館, 西洋近現代史研究会会報, 西洋近現代史研究会, 27, (2013 年 7 月刊行予定).		
32	<u>池邊範子</u> , フリッツパウアーと西ドイツの「自由化」, 現代ドイツへの新たな視座 第 1 巻市民社会の史的展開—理念と実相, 勉誠出版 (2013 年 9 月刊行予定).		

整理番号	著者名、発表論文名、学会誌名、発表年月巻号等	査読	相手国名 (共著の場合)
33	伊東直美, 1913年ドイツにおける国籍法改正論議—「血統に基づく共同体」?, 現代ドイツへの新たな視座 第1巻市民社会の史的展開—理念と実相, 勉誠出版(2013年9月刊行予定).		
34	川喜田敦子・石田勇治, 市民社会の新たな展開—第二次世界大戦後のドイツ, 現代ドイツへの新たな視座 第1巻市民社会の史的展開—理念と実相, 勉誠出版(2013年9月刊行予定).		
35	穂山洋子, スイスのホロコースト関与とその後—難民政策を中心に, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
36	猪狩弘美, ナチ強制収容所体験と生存者たちのその後, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
37	石田勇治, 「過去の克服」日独比較 日本とドイツ, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
38	川喜田敦子, 民族自決から民族浄化へ—住民移動から「ホロコースト」を考える, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
39	川喜田敦子, 第二次世界大戦後のドイツの戦争賠償と「ナチ不法に対する補償」—在外財産問題に着目して, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
40	佐藤公紀, 教育刑と犯罪生物学—ヴァイマルからナチズムへ, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
41	増田好純, ナチ強制収容所とドイツ社会, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
42	柳原伸洋, 戦間期ドイツにおける民間防衛共同体—実践の民族共同体, 現代ドイツへの新たな視座 第2巻ナチズム・ホロコーストと戦後ドイツ, 勉誠出版(2013年10月刊行予定).		
43	磯部裕幸, 植民地支配の記憶—想起と抑圧そして忘却, 現代ドイツへの新たな視座 第3巻想起の文化とグローバル市民社会, 勉誠出版(2013年11月刊行予定).		
44	川喜田敦子, ポーランドとの和解に向けて—「追放」の長い影, 現代ドイツへの新たな視座 第3巻想起の文化とグローバル市民社会, 勉誠出版(2013年11月刊行予定).		
45	川喜田敦子, ヨーロッパの歴史認識の現在—共通教科書プロジェクトをめぐる, 現代ドイツへの新たな視座 第3巻想起の文化とグローバル市民社会, 勉誠出版(2013年11月刊行予定).		
46	柳原伸洋, ドレスデン空襲の記憶史—コヴェントリーとの関係を中心に, 現代ドイツへの新たな視座 第3巻想起の文化とグローバル市民社会, 勉誠出版(2013年11月刊行予定).		
47	Y. Akiyama, Die Zeitschrift „Shimin“, in: M. Hetling / T. Schölz (Hg.), „Bürger“ und „Shimin“. Wortfelder und Begriffstraditionen im Deutschen und Japanischen, Berlin (2013年11月刊行予定)	○	
48	Y. Ishida, Der Weg von der „bürgerlichen Gesellschaft“(shimin shakai) zur „Gesellschaft der Bürger“(shimin no shakai), in: M. Hetling / T. Schölz (Hg.), „Bürger“ und „Shimin“. Wortfelder und Begriffstraditionen im Deutschen und Japanischen, Berlin (2013年11月刊行予定)		
49	R. Ishizaki, „Bürgermeister“ und „Bürgermädchen“ Japanische Übersetzungen von Goethes „Faust“ seit der Meiji-Zeit, in: M. Hetling / T. Schölz (Hg.), „Bürger“ und „Shimin“. Wortfelder und Begriffstraditionen im Deutschen und Japanischen, Berlin (2013年11月刊行予定)	○	

②国際会議における発表

- ・著者名(参加研究者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載すること)、発表題名、発表した学会名、開催場所、論文等の番号、発表年月日等を記載すること。発表者に○印を付すこと。
- ・査読がある場合、「査読」欄に○印を付す。

整理番号	著者名、発表題名、学会名、開催場所、口頭・ポスター等の形式、論文等の番号、発表年月日等	査読	相手国名 (共同発表の場合)
1	○Y. Akiyama, Die Ausschließung der Juden und der "Ostjuden" aus der schweizerischen Gesellschaft unter besonderer Berücksichtigung des Schächtverbots und der Erschwerung der Einbürgerung der "Ostjuden" in der Stadt Zürich, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月6日.		
2	○N. Ito, Die Erfindung der nationalen Identität. Die Reform des Reichs- und Staatsangehörigkeits-gesetzes von 1913, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月6日.		
3	○K. Sato, Resozialisierung und Disziplin – eine Studie zum Gefängnisssystem in Deutschland in den 20er Jahren, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月7日.		
4	○N. Yanagihara, Das System des totalen Krieges und der zivile Gas- und Luftschutz – Von Luftschutzgemeinschaft zu Volksgemeinschaft –, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月8日.		
5	○T. Hirano, Gedenken an den Russisch-Japanischen Krieg in Matsuyama: Erinnerungspolitik mit dem Roman Saka no Ue no Kumo, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月9日.		
6	○T. Saito, The role of the history of philosophy by Kant, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月9日.		
7	○Y. Masuda, Die Außenlager der Junkers Flugzeug- und Motorenwerke AG, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2007, ハレ大学, 口頭, 2007年10月9日.		
8	○Y. Ishida, Vergleichende Forschung zur deutschen und japanischen Zivilgesellschaft. Aufgaben und Chancen aus japanischer Sicht, Symposium: Internationale Graduiertenkolleg, „Formwandel der Bürger Gesellschaft“. Japan und Deutschland im Vergleich, ハレ大学, 口頭, 2007年10月12日.		
9	○T. Onuki, Zivilgesellschaft und Religion. Japan und Deutschland heute, Symposium: Internationale Graduiertenkolleg, „Formwandel der Bürger Gesellschaft“. Japan und Deutschland im Vergleich, ハレ大学, 口頭, 2007年10月12日.		

整理番号	著者名、発表題名、学会名、開催場所、口頭・ポスター等の形式、論文等の番号、発表年月日等	査読	相手国名 (共同発表の場合)
10	OH. Igari, Die KZ-Überlebenden in der Nachkriegsgesellschaft – Spätfolgen und der Einfluss der Greuel auf ihr Leben, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2008, 東京大学, 口頭, 2008年3月13日.		
11	OY. Masuda, Der Arbeitseinsatz bei Junkers Flugzeug- und Motorenwerke: Deutschen, Ausländer und KZ-Häftlinge, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2008, 東京大学, 口頭, 2008年3月13日.		
12	OK. Sato, Zwischen „Erziehbare“ und „Unerziehbare“ – Problematik der Kriminalbiologie und „Erziehbarkeit“ in der Weimarer Republik (1919–1933), Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2008, 東京大学, 口頭, 2008年3月14日.		
13	ON. Ito, Die Erhaltung des Deutschtums? Die Aktivitäten des Fürsorgevereins für deutsche Rückwanderer, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2008, 東京大学, 口頭, 2008年3月15日.		
14	OT. Saito, Welche Bedeutung kann der Republikanismus Kants in der politischen Theorie haben? , Internationale Doktorandenkonferenz der vom DAAD geförderten Zentren für Deutschland- und Europastudien, CIERA(Centre interdisciplinaire d' études et de recherches sur l' Allemagne, パリ, フランス), 口頭, 2008年7月2日.		
15	OS. Inoue, Die Kölner Barbierszunft im 15. und 16. Jahrhundert, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Herbstakademie 2008, ハレ大学, 口頭, 2008年10月7日.		
16	OK. H. Kim, Security Sector Reform. Ein System der Stabilitätsreichung in Postkonfliktregionen, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Herbstakademie 2008, ハレ大学, 口頭, 2008年10月7日.		
17	ON. Yamawaki, "Zivilgesellschaft" and "bürgerliche Gesellschaft": Present and Historical Development in Germany and Japan, Symposium Internationale Graduiertenkolleg : Civil Society in Germany and Japan: Concepts and Practice, ハレ大学, 口頭, 2008年10月9日.		
18	OY. Ishida, Overcoming the past. The postwar Japan and Germany, Symposium Internationales Graduiertenkolleg : Civil Society in Germany and Japan: Concepts and Practice, ハレ大学, 口頭, 2008年10月10日.		
19	ON. Ikebe, Fritz Bauer und die Protestaktionen, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2009, 東京大学, 口頭, 2009年3月11日.		
20	ON. Yanagihara, Zur (un)freiwilligen Beteiligung der Frauen an der Wehraktivität – Die Frauenvereinigung zur Landesverteidigung (Kokubō fujin-kai) 1931–1945, 14. Deutschsprachiger Japanologentag in Halle, ハレ大学, 口頭, 2009年10月1日.		
21	OK. Sato, Strafe und Wohlfahrt – Zur Problematik der Gefängnisreform, Kriminalbiologie und Entlassenenfürsorge in der Weimarer Republik, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Herbstakademie 2009, ハレ大学, 口頭, 2009年10月7日.		

整理番号	著者名、発表題名、学会名、開催場所、口頭・ポスター等の形式、論文等の番号、発表年月日等	査読	相手国名 (共同発表の場合)
22	○Y. Masuda, Arbeitseinsatz der KZ-Häftlinge bei der Junkers Flugzeug- und Motorenwerke AG, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Herbstakademie 2009, ハレ大学, 口頭, 2009年10月7日.		
23	○Y. Nagasawa, Deutschlands und Österreichs politische Symbole im 19. und 20. Jahrhundert : die Beziehung zwischen der „deutschen Frage“ und den Nationalflaggen, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Herbstakademie 2009, ハレ大学, 口頭, 2009年10月8日.		
24	○F. Eguro, Die Erörterung des Abendlands in der Philosophie Heideggers, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Herbstakademie 2009, ハレ大学, 口頭, 2009年10月8日.		
25	○H. Hasegawa, Historismus gegen Rassismus, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2010, 東京大学, 口頭, 2010年3月9日.		
26	○M. Suzuki, Der jugendliche Widerstand- Die Verhaftungswelle an der Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2010, 東京大学, 口頭, 2010年3月9日.		
27	○Y. Akiyama, Die Hegemonie der Mehrheit in einer multikulturellen Gesellschaft. Unter besonderer Berücksichtigung des Schächtverbots im Jahr 1893 in der Schweiz“, Deutschland und Europa: Grenzen und Grenzgänge(r), Interdisziplinäre DAAD-Konferenz mit Beteiligung der Zentren für Deutschland- und Europastudien. In Kooperation mit dem Wissenschaftszentrum Berlin (WZB) vom 5. Bis 8. Mai 2010 in Berlin, ドイツ・ベルリン学術センター(WZB), 口頭, 2010年5月7日.	○	
28	○S. Izuta, Der Kulturbund in Ostdeutschland: Freiwilliger Verein und Massenorganisation, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Herbstakademie 2010, ハレ大学, 口頭, 2010年9月23日.		
29	○S. Kobayashi, Supplikationswesen in der Hexenverfolgung im Kurfürstentum Mainz, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Herbstakademie 2010, ハレ大学, 口頭, 2010年9月23日.		
30	○H. Hasegawa, Lage der Geschichte in der Postmoderne: Mit dem späten Ernst Jünger denkend, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Herbstakademie 2010, ハレ大学, 口頭, 2010年9月24日.		
31	○M. Shiratori, Zwischen Fremdheit und Vertrautheit: Über Du-Erfahrung und Sprache bei Hans-Georg Gadamer, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Herbstakademie 2010, ハレ大学, 口頭, 2010年9月24日.		
32	○N. Yanagihara, Ziviler Gas- und Luftschutz in der Zwischenkriegszeit, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Herbstakademie 2010, ハレ大学, 口頭, 2010年9月24日.		
33	○R. Ishizaki, Mori Ôgai (1862-1922) und Richard Dehmel (1863-1920), Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkollege Frühjahrsakademie 2011, 東京大学, 口頭, 2011年3月11日.		

整理番号	著者名、発表題名、学会名、開催場所、口頭・ポスター等の形式、論文等の番号、発表年月日等	査読	相手国名 (共同発表の場合)
34	OY. Nagasawa, Die großdeutsche Tendenz in Deutschland und Österreich nach 1918 : Diskussionen um Nationalsymbole und Geschichtsauffassung, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Frühjahrsakademie 2011, 東京大学, 口頭, 2011年3月11日.		
35	OS. Izuta, Gründung und Frühphase des Kulturbundes, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2011, ハレ大学, 口頭, 2011年10月6日.		
36	OS. Kobayashi, Kommissare in der kurkölnischen Hexenverfolgung, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2011, ハレ大学, 口頭, 2011年10月6日.		
37	OK. H. Kim, Soziale Reintegration von Ex-UCKs, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2011, ハレ大学, 口頭, 2011年10月6日.		
38	OM. Tamura, Die Entwicklung der deutsch-jüdischen Beziehungen nach dem Zusammenbruch des NS-Regimes — Erfolge und Grenzen der Versuche zur Versöhnung, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2011, ハレ大学, 口頭, 2011年10月6日.		
39	OH. Hasagawa, Die Einsichten in die „Technik“ im Denken des 20. Jahrhunderts: Martin Heidegger und Ernst Jünger, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2011, ハレ大学, 口頭, 2011年10月7日.		
40	OH. Imai, Vom Freikorpsführer zum Kommunisten. Gewalterfahrung und Wandlung Josef “Beppo” Römers in der Zwischenkriegszeit, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo Herbstakademie 2011, ハレ大学, 口頭, 2011年10月9日.		
41	OR. Ishizaki, Rezeptionsgeschichte des deutschen Lyrikers Richard Dehmel (1863-1920), Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Frühjahrsakademie 2012, 東京大学, 口頭, 2012年3月10日.		
42	OH. Imai, “Brutalisierung der Politik”? Bürgerkrieg und Gewalterfahrungen im Deutschland der Zwischenkriegszeit, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Frühjahrsakademie 2012, 東京大学, 口頭, 2012年3月10日.		
43	OF. Eguro, Die Stimme als Leitfaden des Sinnes der Phänomenologie, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Frühjahrsakademie 2012, 東京大学, 口頭, 2012年3月10日.		
44	OM. Shiratori, Verstehens- und Übersetzungstheorien von Hans-Georg Gadamer und Friedrich Schleiermacher im Vergleich, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Frühjahrsakademie 2012, 東京大学, 口頭, 2012年3月10日.		
45	OY. Nagasawa, Anschluss Österreichs an Deutschland : kulturelle „Angleichungspolitik“ in der Zwischenkriegszeit im Fokus, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Frühjahrsakademie 2012, 東京大学, 口頭, 2012年3月13日.		

整理番号	著者名、発表題名、学会名、開催場所、口頭・ポスター等の形式、論文等の番号、発表年月日等	査読	相手国名 (共同発表の場合)
46	OS. Izuta, Der Kulturbund im Krisenjahr 1953, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Sommerakademie 2012, ハレ大学, 口頭, 2012年7月15日.		
47	OH. Lang, Der japanische Diskurs über die Südostasienpolitik in der Zwischenkriegszeit, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg Halle-Tokyo, Sommerakademie 2012, ハレ大学, 口頭, 2012年7月15日.		
48	ON. Matsumoto, Deutschlands sozio-ökonomische Politik und die Europäische Beschäftigungsstrategie im Raum der Europäischen Union, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg, Sommerakademie 2012, ハレ大学, 口頭, 2012年7月15日.		
49	OS. Amitani, Der Naturbegriff in Kants Sozialphilosophie: Geschichte, Regierung und Aufklärung, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg, Sommerakademie 2012, ハレ大学, 口頭, 2012年7月16日.		
50	OK. Sakai, Was meinen wir genau mit einer empirischen Beschreibung des politischen Systems?, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg, Sommerakademie 2012, ハレ大学, 口頭, 2012年7月16日.		
51	OF. Eguro, Das Selbstbildnis mit Blick auf ein Selbst: die phänomenologische Narratologie, Japanese-German Graduate Externship Joint Seminar Internationales Graduiertenkolleg, Sommerakademie 2012, 口頭, 2012年7月16日.		

③国内会議・シンポジウム等における発表

・②と同様に記載してください。

整理番号	著者名、発表題名、学会名、開催場所、口頭・ポスター等の形式、論文等の番号、発表年月日等	査読	相手国名 (共同発表の場合)
1	○外村大, 在日韓国人の戦後史—不参加と排除のなかの奇妙な安定, 2008日独共同大学院プログラム国際シンポジウム 市民と市民社会を問う—過去・現在・未来—日独比較研究の視点から, 東京大学, 口頭, 2008年3月19日.		
2	○外村大, 在日コリアンをめぐる問題から考える日本の戦後史, 2010日独共同大学院プログラム国際シンポジウム 日独比較研究の可能性—市民社会の観点から, 東京大学, 口頭, 2010年3月11日.		
3	○Y. Akiyama, Perspektiven auf die Deutschland- und Europastudien in Japan —aus der Sicht einer jungen Wissenschaftlerin, DESK 設立 10周年記念シンポジウム「ドイツ・ヨーロッパ研究の展望—日本の視座から—」, 東京大学, 口頭, 2010年10月28日.		
4	○T. Saito, Perspektiven auf die Deutschland- und Europastudien in Japan —aus der Sicht eines jungen Kant-Forschers, DESK 設立 10周年記念シンポジウム「ドイツ・ヨーロッパ研究の展望—日本の視座から—」, 東京大学, 口頭, 2010年10月28日.		
5	○山脇直司, ポスト 3.11 の市民社会と新しい公共, 2012日独共同大学院プログラム国際シンポジウム ポスト 3.11 の日独市民社会, 東京大学, 口頭, 2012年3月11日.		
6	○今井宏昌, 戦間期ドイツにおけるナショナル・コミュニストの登場: 義勇軍指導者ヨーゼフ・ベッポ・レーマーを例に, 九州史学会 2011年度大会 西洋史部会, 九州大学, 口頭, 2011年12月11日.		

7	○今井宏昌, 戦間期ドイツにおける義勇軍経験:「ナチズムの前衛」テーゼからの解放は可能か?, 西洋近現代史研究会 第 268 回例会, 専修大学, 口頭, 2011 年 12 月 17 日.		
8	○今井宏昌, ヴァイマル共和国期ドイツ義勇軍再考:経験史の観点から, 日本西洋史学会 第 62 回大会, 明治大学, 口頭, 2012 年 5 月 20 日.	○	

(3) 共同セミナーの開催実績について記入してください。(詳細は別表2により記入してください。)

1	セミナー名	'07 日独共同大学院プログラム秋季・共同セミナー	
	開催期間	平成 19 年 10 月 5～12 日(8 日間)	
	開催場所	ハレ大学	
	参加者数	日本側	合計 14名(教員6名、大学院学生8名)
		ドイツ側	合計 17名(教員8名、大学院学生9名)
2	セミナー名	'08 日独共同大学院プログラム春季・共同セミナー	
	開催期間	平成 20 年 3 月 12～19 日(8 日間)	
	開催場所	東京大学	
	参加者数	日本側	合計 20名(教員10名、大学院学生10名)
		ドイツ側	合計 10名(教員4名、大学院学生6名)
3	セミナー名	'08 日独共同大学院プログラム秋季・共同セミナー	
	開催期間	平成 20 年 10 月 4～10 日(7 日間)	
	開催場所	ハレ大学	
	参加者数	日本側	合計 18名(教員5名、大学院学生13名)
		ドイツ側	合計 17名(教員6名、大学院学生11名)
4	セミナー名	'09 日独共同大学院プログラム春季・共同セミナー	
	開催期間	平成 21 年 3 月 9～13 日(5 日間)	
	開催場所	東京大学	
	参加者数	日本側	合計 23名(教員10名、大学院学生13名)
		ドイツ側	合計 14名(教員4名、大学院学生10名)
5	セミナー名	'09 日独共同大学院プログラム秋季・共同セミナー	
	開催期間	平成 21 年 10 月 5～9 日(5 日間)	
	開催場所	ハレ大学	
	参加者数	日本側	合計 16名(教員4名、大学院学生12名)
		ドイツ側	合計 17名(教員6名、大学院学生11名)
6	セミナー名	'10 日独共同大学院プログラム春季・共同セミナー	
	開催期間	平成 22 年 3 月 8 日～12 日(5 日間)	
	開催場所	東京大学	
	参加者数	日本側	合計 18名(教員5名、大学院学生13名)
		ドイツ側	合計 12名(教員4名、大学院学生8名)
7	セミナー名	'10 日独共同大学院プログラム秋季・共同セミナー	
	開催期間	平成 22 年 9 月 23 日～28日(6日間)	
	開催場所	ハレ大学	
	参加者数	日本側	合計 12名(教員5名、大学院学生7名)
		ドイツ側	合計 18名(教員8名、大学院学生10名)
8	セミナー名	'11 日独共同大学院プログラム春季・共同セミナー	
	開催期間	平成 23 年 3 月 8 日～11 日(4 日間)	
	開催場所	東京大学	
	参加者数	日本側	合計 18名(教員7名、大学院学生11名)
		ドイツ側	合計 13名(教員4名、大学院学生 9名)
9	セミナー名	'11 日独共同大学院プログラム秋季・共同セミナー	
	開催期間	平成 23 年 10 月 6 日～10 日(5 日間)	
	開催場所	ハレ大学	
	参加者数	日本側	合計 12名(教員3名、大学院学生9名)
		ドイツ側	合計 16名(教員6名、大学院学生10名)

10	セミナー名	'12 日独共同大学院プログラム春季・共同セミナー	
	開催期間	平成 24 年 3 月 9 日～13 日(5 日間)	
	開催場所	東京大学	
	参加者数	日本側	合計
ドイツ側		合計	10名(教員2名、大学院学生8名)
11	セミナー名	'12 日独共同大学院プログラム夏季・共同セミナー	
	開催期間	平成 24 年 7 月 13 日～17 日(5 日間)	
	開催場所	ハレ大学	
	参加者数	日本側	合計
ドイツ側		合計	20名(教員10名、大学院学生10名)

※ 6件以上となる場合には、適宜枠を追加して記入してください。

(4) 派遣・受入実績について記入してください。(詳細は別表3により記入してください。)

(名)

	派遣数(日本→ドイツ)			受入数(ドイツ→日本)		
	教員等	大学院生	合計	教員等	大学院生	合計
平成 19 年度	5	8	13	4	6	10
平成 20 年度	5	17	22	4	11	15
平成 21 年度	5	13	18	5	11	16
平成 22 年度	7	11	18	6	9	15
平成 23 年度	5	16	21	2	9	11
平成 24 年度	4	11	15	0	2	2